

# 上映映画解説

1955, 9 ~ 10

国立近代美術館 フィルムライブラリー



No. 38

## 月例映写会

### 「ベルギーの芸術映画特集」

ついで

国立近代美術館のフィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めております。今回「晩期の鉄斎」展の期間中の月例映写会はベルギー大使館の御好意により、我が国では殆んど触れる機会のない「ベルギーの芸術映画特集」を企画し次のような作品を、毎週火・木・金・土曜日の二時から（日・水曜日には古典映画鑑賞会「マッターホーン」）上映いたします。

### リューベンス

八巻

脚本・解説

ポール・エセル

監督

ポール・エセル

アンリ・ストルク

(九月二一〜二七日)

### せむし男

三巻

人形劇場 トーン座

G・D・Bプロ作品

監督

ジャン・克蘭ジュ

(九月二〇日〜二〇月九日)

その他

ベルギーでは、芸術性豊かな非劇映画の製作が盛んで、異色ある作品を数多く生み出しています。今回の催しでその一端をうかがうことができます。

### リューベンス

嘉門 安雄

ペーター・ポール・リューベンスは十七世紀ベルギー第一の画家——と言うより、オランダのレムブラン

ト、スペインのヴェラスケスと共に十七世紀ヨーロッパ最大の画家であり、ある意味では、十七世紀はリューベンスの時代と言ってもよいであろう。

六十三年の多幸な生涯のうちに描いた絵は宗教画、神話画、肖像画、風景画、静物画と凡ゆる種類にわたっており、そのいずれの作品に於ても、生命の美しさと豊かさが満ちあふれている。今日、彼をよぶに「生命のよろこびの画家」、「肉体の健康と明るさと躍動の画家」という。

十七世紀は改めて言うまでもなく、スペイン、フランスをはじめ、新たに勃興した商業力と結びついた強大な王権の時代であり、謂わば宮廷文化の時代である。そのような時代の豪華趣味と現実謳歌——というか、地上生活のよろこびと豊かさと華麗さを最もよく代表する画家こそリューベンスなのである。

しかも彼ほど、所謂油絵画家らしい画家もまた少ないであろう。その明るく豊かな色彩と、健康そのものような人間の描写は全く無類であり、特に豊潤な女性の肉体描写は他の如何なる画家をもつしても彼に及ばないのである。

リューベンスの作品は今日数百をもって数えられるであろう。そして、その一つ一つが世界各国の美術館の中で、さながら太陽の如く輝き、明るい女性の肉体の讚美と、力強く逞しい感情の昂揚と、豊麗にして光沢に満ち、調和と柔軟と、軽快と豊富とが、快よく晴やかな生命のよろこびの交響楽を奏しているのである。

この映画はそのような大リューベンスの数々の名品を自由自在に駆使して、余すところなく彼の本領を描き出している。製作は既に「ピカソ訪問」や「ルノアールからピカソまで」で定評のあるシュトルクとエセル。ここでもまた、この二人のすぐれた美術映画人は得意の画面分割法を用いて、リューベンスの作品の構図の説明からスタートしているが、作品の性格や、美術史上の彼の地位を十分に知った上での方で、極めて鮮やかである。即ち、先づ彼に先行する十五、十

六世紀のフランドル画家、ファン・アイク、ゴッス、ボッシュ、ブリュゲル、メムリンク等の作品との比較、美展を示し、ついで自画像、家族図などによって、リューベンス自身の発展と解明に進んでゆく。

如何なる場合に於ても、リューベンスの作品の豊富なことが製作者の最も心強い支柱である。彼の環境を描き、彼の生活を描く場合、そしてテクニクの円熟や変遷を描くときでも、惜し気もなく各時期の同種類の作品を数多く用い、そのため、映画の画面には厚味と迫力が満ち満ちしている。

全篇を通じて特に見ごたえのあるのは、リューベンス芸術の頂点とも言ふべき、豊かな女性の肉体の解説であり、それにつづく手の美しさの種々相であろう。しかし画面の焦点は決してここだけではない。それより前の、例えばリューベンスに多くの影響を与えた十六世紀ヴェニス派との比較、彼の芸術の刺戟の下に円熟した後世のドラクロアやルノアールとの比較、更にはワトーへの影響などを描き出した場面も見事であり、終りに近く、リューベンスの作品に現れたキリストの生涯や、各種の踊りの情景を巧みに集めた部分も深く印象的である。

いづれにせよ、この映画はリューベンスという大芸術家をよくマスターした上での仕事である。しかも、あくまでも彼の構図に重点を置いているところに一つの特色がみられる。製作の意図としては、所謂大衆性をかなり意識しているが、そのためにリューベンスの芸術を殊更に概念的に扱うことはせず、製作者自身、彼のすばらしさに十分打ちこんでいるので、全篇に快よい香気がたがよっている。

上映時間一時間余。一人の芸術家の作品を扱った美術映画としては記録的な長篇にもかかわらず、それを中だるみなくまとめ上げた製作者の手腕と、そしてそのような素材を提供しているリューベンスの芸術の偉大さに、改めて敬服する記念碑である。(当館運営委員)

## 人形劇映画「せむし男」

厚木たか

ベルギー映画といえは、わたしたちには、たいへん珍らしいお客様にお目にかゝる気持だが、わけて人形映画とあれば興味は一層つきぬものがある。ポール・フェバル原作の古劇「せむし男」(全三巻、一九五三年作品)は、しかし、人形映画というよりむしろ、ブラッセルのトーン劇場というマリオネット(操り人形)劇場の記録映画といったものである。

ベルギーの古都ブラッセルの落ちついた雲間気、石だたみの街路にむかって古い風格をみせている煉瓦づくりのこじんまりした劇場。——ここでは、日暮まで街で自動車のタイヤの修繕をやっていたような働く人たちが、人形劇の台詞をかたり、人形の操作をやっている。

立体的な、そして芸術的な舞台装置、操作をする人びとはこの奥行き深い舞台装置の大道具の蔭に身をよせているが、ときどきは半身をあらわして人形に小道具をもたせたりする動作が、おそらくは観客席からもみえるのだろう。映画では、カメラは、台裏にまでもいりこんで、これ等舞台の機構をみせてくれる。大胆な、機動的な舞台転換。映画ではこの舞台転換をうまく使ってワイプの効果を出して筋をはこんでゆく。

人形は、フランス風のスタイルとでも云うのだろうか、有名なミュンヘンあたりのマリオネット劇場の北欧的なものと大分へだたりがある。芝居の味が仇討物語で、各場面に、ふんだんな剣劇がくりひろげられるわけだが、人形がみんな可愛らしくて、どれが憎むべき仇役なのか一寸見にわからなかったりするものも、人形劇のほほえましきであらう。

すべての人物の台詞は一人の語り手によってかたられる。台詞は、マロル語というフランス語とオランダ語をつまませた古い方言なのさそうであるが、韻をふんだ台詞の格調が、ふつくと豊かな男声によって

流れ、耳に快くふれてくる。

この映画でみるところでは、台詞、人形操作とも老人の手ではこぼれ、観客もまた年老いた男女であるのはどういふことなのだろう、芝居の出しものが古典劇であるためなのだろうか。日本の人形浄瑠璃「文楽」なども一部はそうであるように、こころした人形劇場が、映画などをあまりたのしまない年老いた人たちの憩いの場なのかもしれない。

ベルギー大使館のブルムさんのお話だと、人形劇場は、ベルギーでも常設のものより移動公演のものがたくさんあって、子供にもおとなにも親しまれているものである。

タイトルと劇場のまわりの街の夕ぐれの最初の場景がモノクロームで撮影され、人形劇場にはいると、色彩映画になってそこにはとりどりの色彩とたのしい音楽にみちあふれた人形芝居の雰囲気が強調されているのは、たいへん大胆な色彩の使い方で面白いと思つた色彩フィルムは国産のゲヴァ・カラーを用いたものと思われ、ところどころ少し色のにじむような所もあるが、全体に落着いた色彩効果が統一されていて美しい。上映時間わずか三十分足らずの中に、ベルギーの伝統に生きる人形芝居の雰囲気をあますところなく伝えていたいへんたのしい映画だ。

最近、日本には、各国の人形による色彩映画(短篇)がたくさん輸入され上映せようとしている。「呑みすぎた一杯」「水玉の幻想」「チェッコ」「星空の下のサーカス」(ポーランド)などのように、人形を駒どり(人形を少しずつつ動かして漫画映画の動きと同じ効果を出すもの)にしたものや「赤ずきん」(アメリカ)「ゼロ弾きのゴージュ」(日本)などのようにギニョール(手づかい人形)を使つたものや、「孫悟空」(中国)やこの「せむし男」(ベルギー)のようにマリオネットによるものなどと、製作の方法も多種多様でそれぞれに特徴をもつていて面白いことを御紹介しておく。(映画製作者)